



## 世代交代のお願い

代表 奥津 亘

伝統の国英国で保守党を中心とする連立政権が誕生しました。首相をはじめ、みんな若い。若いというのは、それだけで価値があります。

わが福祉オンブズおかやまも若返りを図らねばなりません。

これまでの役員メンバーを中心にすると、もはや自然死は時間の問題でしょう。現在の役員メンバーの大半は高齢化は甚だしいし、それなりに健康問題も抱えています。

もし、この団体を続けるとしたら、ここらで新しいメンバーで新しい方針を立てて、次の10年間に入る必要があると思います。そうしないと、この団体は、しばらくはこれまでと同じようなことをしながら細々と続くでしょうが、そう長くはないでしょう。

しかし、今までそれなりにやってきたものを延命しないのもいささか未練が残ります。

若返りと世代交代をお願いします。

### 2010年度 会費納入のお願い

年会費 3,000円

2010年度の会費納入をお願いします。  
また、前年度未納の方もお願いします。  
当会は、みなさんの会費で支えられていますので、よろしくをお願いします。不明な点のお問い合わせは、090-9410-6488(山田)まで。

### ご案内

#### 第11回 ぜんせいれん全国大会 in 岡山

結び合おう心の絆—広げようピアの輪

～共生社会の実現をめざして～

9月25日(土)・26日(日)

岡山大学津島キャンパス

主催：全国精神障害者団体連合会

お問合わせ先、086-271-6603(実行委)

「繋がる」シリーズ(4)  
この人に会いたい!

～繋がる ② 理論と実践をつなぐ～

橋本 眞紀さん

前回、ご紹介した橋本さん。3月末に吉備国際大学 保健科学部 看護学科 を定年退職され、現在は甲南女子大学で教鞭を執っておられます。

「人が人を援助する」ためには、

- (1) 援助対象としての「人」の理解なしには成立しない。
  - (2) 援助職者自身が支えられていること（誰かに支えられた体験を持っていること）。
- を大前提とし、教育・研修をしておられます。

今回は、「理論と実践をつなぐ」というお話をまとめました。

<受けてきた職人教育>

- 大学で学生を教えるときに、大事にされていることを教えてください。

**橋本** 現場職員にも学生にも教えたいことの根っこは変わらないんだけど、学生には理論は理論として学ばせたいと思っています。

私達の時代は、とにかく「理論より実践」が先だったから。食べさせてくれて、泊まらせてくれて、勉強させてくれて、その代わり看護学校時代は、学生でありながら一労働力としてみなされ、例えば注射の係りになったら、一日中注射して歩くような「とにかく慣れる」という職人教育を受けました。

一方で、労働力として使われるゆえに、私たちは「看護学とは何ぞや」と言うことにこだわりは強く、医師ではない、「看護の専門性や独自性は何なのか?」ということを追及する思いは強かったですね。保健師になるときに受けた教育もそうなのよ。「学問」としてというより、「実践の職人」としての育成が強かった。そこから私は「実践活動というのは、自分の目の前にある課題から目をそらさない、逃げないことだ」ということを学びました。

学生運動をやってきたことも影響していると思うけれど、そこから「逃げない」という私のポリシーを作ったんだと思う。逃げないで問題を解決するためには、どうすればいいかを考えざるを得ないから一生懸命考えるじゃないですか。どうすればこの目の前の課題が解決するかと、試行錯誤するの。私は、四苦八苦の中で考えて、考えて道を歩んできた職業人生だったんです。

<理論の大切さ>

それがあつた時の地域看護学会で、大学院卒業の保健師が研究発表したんよ。それが見事にスマートだった。大学院卒業して地域の仕事をするとこもスマートに出来るものかと感心、感動した(笑)。

例えば、地域の組織化をするとき、四苦八苦悩まなくても、ここをこういう風にすればこうなっていくだろうという見通しがあるから、とてもスマートに実践をしているんだと感じたんです。

そこが学問として、理論の背景を持っているものと、持たざるものとの違いだなと思ったわけね。頭でっかちに理論に当てはめるとするのは良いことではないし、現実からもか

け離れたりしてしまうこともあるけれど、理論を持っていることと持っていないことは、例えば相談援助技術のことで言えば、危機理論の枠組みを持っているのと持っていないのとで「この人」をみるのは、すごく違うでしょ。対象喪失の今どこのあたりにこの人がいるのか、今後どういうプロセスをたどるのかを知っているのと知らないのとでは、今のおかれている状況をどう見るかが違って来るでしょ。それと同じなの。

- ー 現場で今起こっていることを冷静にも見られるし、先を見通して手当てをすることも出来る、ということですね。

**橋本** 先を見通せるからこそ、今の混乱した状況に付き合えるわけですよ。巻き込まれても出てこれると言うのが理論枠を持っているのと持っていないのとの違いだと思う。だとすると、学生にはそこを教えておきたい。ただ学生は実践がないから、理論枠組みを勉強させるのは苦勞します。教科書に書いてあることを教えるだけではなくて、実践に結びつけながら話をするとわかりやすいですよ。理論と言うものを実践のところと統合して使うことができるところまで落とし込んでいくというのは、大学教育の課題だろうなど。なかなかそういう教員が少ないですよ。

### <目から鱗の体験>

- ー 現在、現場でさまざまな研修の企画支援をされていますよね。

**橋本** 1997年の介護保険導入を目の前にした頃、岡山県在宅介護支援センター協議会の理事をしていた私は全国在宅介護支援センター協議会が開催した「現任職員研修のための講師養成研修会」に参加しました。その時に、

目から鱗だったのは、奥川幸子先生（元、東京都老人医療センターソーシャルワーカー現、対人援助トレーナー）と渡部律子先生（現、関西学院大学総合政策学部教授）の「相談援助の知識と技術」「相談・面接の技法」に対する講義です。

それまで自分はずっと相談援助をしてきたから、きちんと出来ていると自負していたと思うのね。だけど中途半端にカウンセリング等を学んでいて、いわゆるカウンセリングが「相談援助」だというような混乱した中にいたんです。相談援助技術というのは、ひとつの流れがあって、そこに意味があって、情報提供もきちんとなされて終結していくっていうきちんと枠組みがあるんですよ。ですから講義を受けて、相談援助技術の枠組みを自分の中で理論立てていなかったことに気が付きました。保健師の教育の中では「相談援助技術」を学ぶことが無かったので、「相談援助技術」とは福祉職の技であり、そこには理論があるんだというのが印象的でした。

さらに「目から鱗」だったのは、「全国」の研修で私が受けた衝撃をどうしても岡山の人に伝えたくて、岡山市の在宅介護支援センター職員研修に奥川先生をお呼びした研修です。まさにOGSV(奥川グループスーパービジョン)の真髄に触れた研修だった。奥川先生は、相談というプロセスが何をどのように聴いて何にむかって何をするのか、そこに必要な技術は何かということを実例検討を通して明確にされたので、私の中で、相談・面接という行為が体系化されました。

これまでの研修というのはこういう相談援助の枠組みがきちんと作られていないと感じたんです。相談援助は経験だけで暗中模索・苦悩してやっていくようなことではだめだと思って、ここをきちんと押さえることが大事なんだなと思ったから、この研修を企画した訳です。私は、「自分が持っていない技は必要

ならそれを持っている人を呼んでくればいい」と常に思っていて、自分がそこに立って教えようという気持ちはない。そこが私の保健師らしさというところで、出来ないことまで自分でひっかぶらなくても、必要な人を必要なときに活用すれば、いくらでも広げられると思っているんです。

\*橋本さんは、ご自身が「目から鱗」の体験をされた、OGSVモデルに基づいた事例検討による相談援助技術研修を、地域の中で「人が人をつむぐ」システムとして作り、実践をされています。

現在、岡山県地域包括・在宅介護支援センター協議会を進めている「相談援助技術研修」についてご紹介します。

介護保険制度施行から10年が経過し、複雑な家族関係を抱える事例、高齢者虐待事例などケアマネジャーだけでは解決困難な状況を抱えた事例が研修会で目立ち、介護保険をも一つの資源とした、地域ケアシステムを構築していく必要に迫られてきた。これらの背景を認識したうえで、「自分たち自身で事例検討会を進めることができるような力を身につけたい」という意欲が現場の職員に高まっていった。

その為、県内各地域への相談援助技術研修のシステムを作っていく必要性から、福祉医療機構の助成申請を行い、参加対象者を拡大して、岡山県内の在宅介護支援センター・地域包括支援センター職員、支援センター受託法人の相談援助職者、市町村保健師、居宅介護支援事業所の介護支援専門員、その他協議会が認めた者等幅広く声かけをし、これまでの協議会で行ってきた研修を広げて、引き続き、地域で相談援助の事例検討会に携わる人材を養成していくことをめざした。

それは各人の対人援助技術のスキルアップ・スーパービジョン実践力を高めるとともに、地域において相談援助技術の研修システムを重層的に構築することが目的であった。

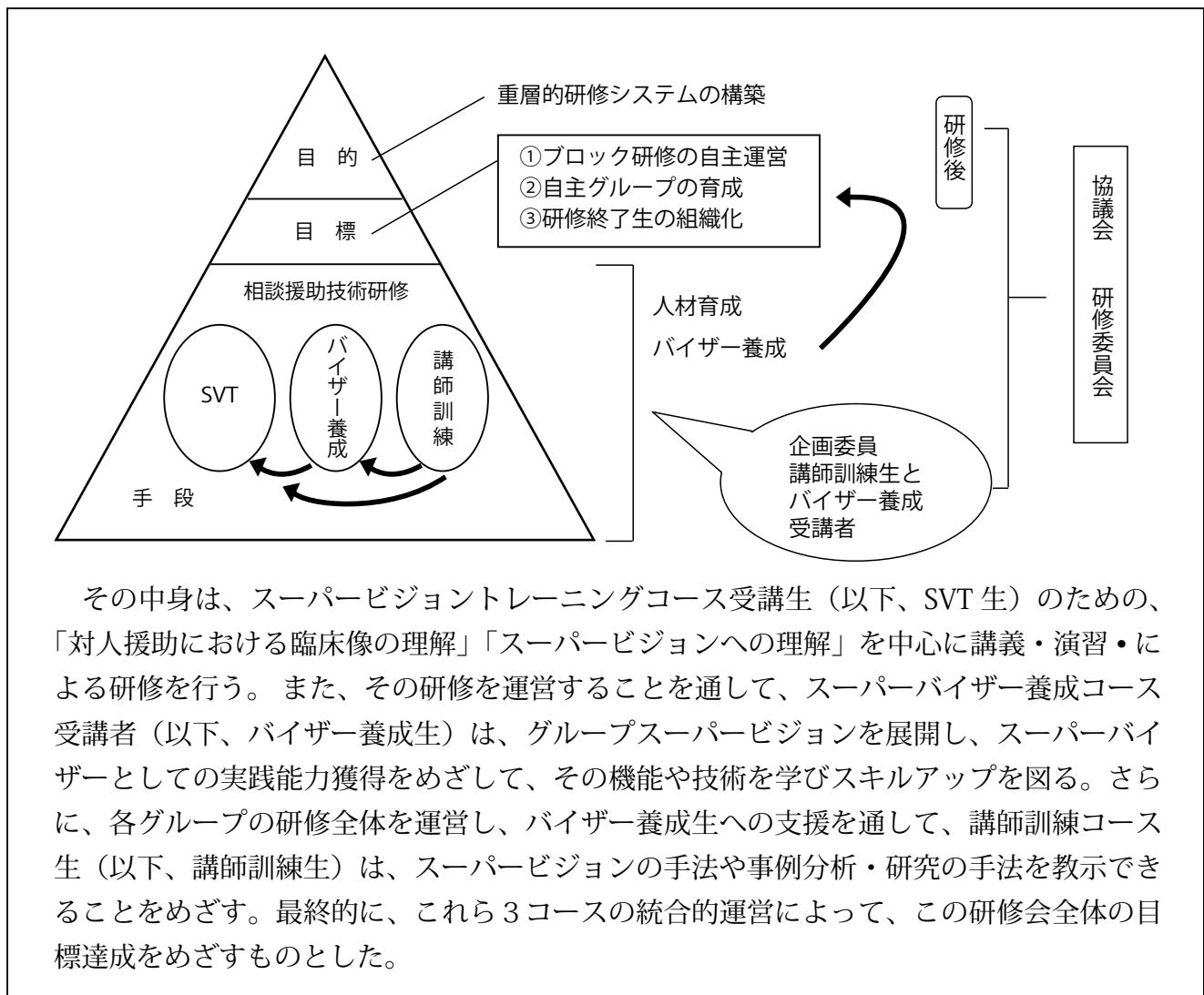
このような目的のもと、2008年7月～2009年3月にかけて全10回 14日間にわたる研修を行った。

- 目標として、
- ①県内ブロック単位での基礎研修を自主運営できること
  - ②各地区で事例検討の自主グループが育成されること
  - ③上記のための研修修了生の組織化を図ることを挙げ、

受講生を

- ・「スーパービジョントレーニングコース」
- ・「スーパーバイザー養成コース」
- ・「講師訓練コース」

の3層に組織化し、事例検討の中でそれぞれの相談援助技能の習熟度に応じた役割を果たしながら、段階を追ってスキルアップできるような体制にした。



橋本さん曰く「地域包括支援センターが行政直轄であれば、主任ケアマネジャーもかなり強いポジションパワーを持つので、安全が保障される関係を作りにくいことを自覚しておかねばならない。給付適正化という名目の監査機能とは切り離して、真にケアマネジャーを支え育成するスーパービジョン機能をもった仕組みを作って欲しいと切望する。人が人を支援するときに必要なことは支援する人が支えられていることである。いかなる状況が露呈しようが安全であることが保障されるからこそ、自己を開示し、自らのケアを内省し、様々な気づきが得られて成長できるのである。そのためにはスーパーバイザーの育成が必須であり、その育成のための重層的システムの構築が重要と考えている。」

(2009年日本在宅医学会ワークショップ3『相談援助職としての“つむぐ力”を育てる』より引用)

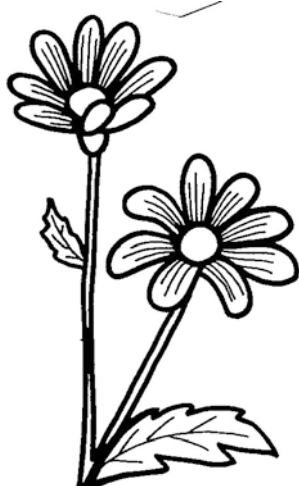
上記の研修で学んだ先達が、現在、岡山県内を3つのブロック（備前・備中・美作）に分かれ、協議会主催の「ブロック基礎研修」を行い、その主たるメンバーがそれぞれの地域で自主研修を立ち上げ、定期的に研修を積んでいます。さらに、研修修了生を組織化し、地域で行われる研修の「企画・運営支援」や「講師派遣」を行っています。

「学問というものは人々のためにどう使われているのか、人々の生活のために役に立たな

かったら意味がない」「専門職や専門家は人々の生活を豊かにするためにある」という思いを実践され、その実践を理論に基づいたものとし、そして後に続く相談援助職者が「理論と実践をつないで」「人が人に支えられて」育っていくシステムを構築された橋本さん。これからもパワフルにご活躍のことでしょうし、私達もしっかりとついていこうと思います。どうもありがとうございました。

（聞き手：若林美佐子&堀川涼子）

# 講演会 & 第11回総会



と き 2010年**5月30日** (日) 1時半～

【第1部】 講演 1:30～3:00

【第2部】 総会 3:10～4:30

ところ 岡山市福祉交流プラザ「旭東」

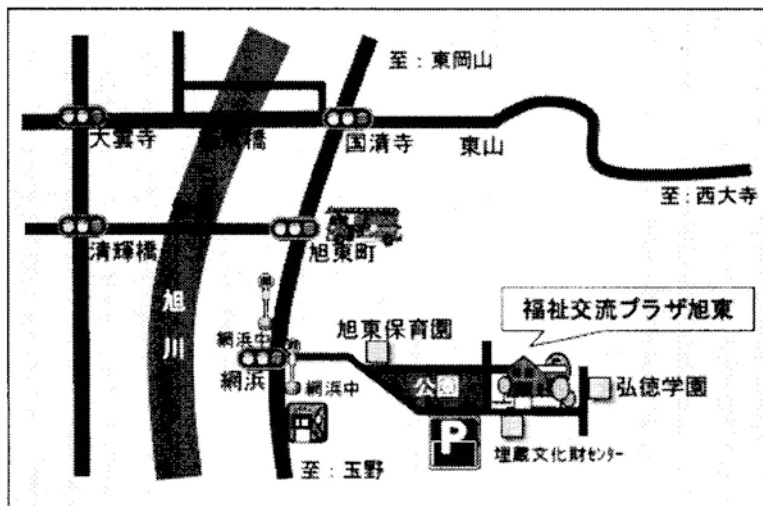
岡山市中区網浜 837-4 TEL 086-273-4280

参加費 会員無料 (2010年度の会費をお願いします)  
一般参加 500円

講 演 **今、求められる地域の福祉力**

講 師 **小坂田 稔さん**

高知女子大学社会福祉学部教授



バス：(両備バス) 新岡山港行き、岡山ふれあいセンター行き、桑野営業所行き、山陽大学・四軒屋経由倉益南行きに乗車、網浜中バス停下車、徒歩3分(網浜信号を東に入る)  
自動車：駐車場あります

<お問い合わせは、090-9410-6488 (山田) まで>

少子高齢化が進む中で、「無縁社会」と言われるように人々のつながりが希薄化しています。児童や高齢者の虐待問題・孤立死・介護うつ・子育てノイローゼなどの様々な問題が起こっています。そして、その問題は重度化・深刻化・複雑化しているのです。

「たとえどんなに重い病気や障害、生活課題を抱えていても、住み慣れた地域でいきいきと暮らしたい」と誰もが願っています。この共通した思いを実現できる“地域の福祉力”が今問われているのではないのでしょうか。

現在、何が必要とされているのか、課題は何かなど、みんなで考えたいと思います。ご参加ください。